論　文

国家社会主義の皇室観

梅澤　昇平

National Socialist Views on the Imperial Family

Shohei UMEZAWA

Abstract

National socialists such as Ikki Kita cannot be ignored in the study of the relationship between Japanese socialists and the Imperial Family. In this context, this paper will outline the common ground and differences in the thoughts of influential national socialists including Kita and in their views on the Imperial Family.

要　約

日本の社会主義者が皇室とどう向きあったかを考えるうえで、北一輝らのいわゆる国家社会主義者を埒外に置くことはできない。そこで北をはじめとする有力な国家社会主義者の思想と皇室観を概観し、その共通性と異質性を探る。

キーワード

国家社会主義（National socialism）
ファシズム（fascism）
超国家主義（ultranationalism）
日本改造法案（An Outline Plan for the Reorganization of Japan）

目次

はじめに
1、国家社会主義とは何か
2、北一輝の思想と皇室観
3、国家社会主義者たち
　3-1　高畠素之
　3-2　津久井竜雄
　3-3　石川準十郎
あとがき

Table of Contents

Introduction
1. What is national socialism?
2. Thoughts of Ikki Kita and his views on the Imperial Family
3. National socialists
　3-1. Motoyuki Takabatake
　3-2. Tatsuo Tsukui
　3-3. Junjuro Ishikawa

はじめに

日本の社会主義者は、皇室とどう向かい合うかによって、ある者は懊悩し、ある者は切り捨て、ある者は現実的対応で潜り抜け、ある者は皇室崇拝主義者としてのめり込んだ。戦前のいわゆる「転向」事件はその極であり、分岐点であった。もう一つは、2.26事件であろう。この事件によって、いわゆる国家社会主義者は息の根を止められた。戦後は、国家社会主義といえば諸悪の根源として蛇蝎のように忌み嫌われ、占領軍によって抹消された、といえるだろう。しかし、かつて三島由紀夫がそうであったように、いまも時々、北一輝が見直され、国家社会主義を再評価する動きは絶えない。岸信介も痺れた一人であった。[i] それはどうしてか。

筆者は、ここ数年、「王冠を戴く社会主義」という名のもとに、社会主義者と王制・皇室との関係、特に、我が国のそれについて研究してきた。その成果は、「王冠を戴く“社会主義”―世界の潮流と昭和期日本の“社会主義者”の皇室観―」[ii]「満州事変を転機とする“錦旗革命”と社会主義革命―昭和前期の社会主義者の皇室観―」[iii]として発表してきたが、本稿はそれに繋がるものである。

ところで問題は、国家社会主義を社会主義の範疇に入るものとして認めるか、認めないか、である。例えば、大著『民主社会主義への200年』を著した社会思想家の関義彦は、国家社会主義を社会主義の範疇に入れるべきではないという立場[iv]であった。国家社会主義とつながるファシズム、ナチズムは社会主義の名で全体主義の蛮行の限りを尽くしたからであろう。しかし全体主義といえば、共産主義もそれではないか。共産主義を社会主義の範疇に入れて、国家社会主義を排除する理由はなにか。そこで、本稿は、国家社会主義も広義の社会主義の範疇に入れる立場を取る。

1. 国家社会主義とは何か

日本の社会主義者の思想の転換として最もユニークなのは、なんといっても赤松克磨であろう。共産主義者として日本共産党に入り、次に社会民衆党のリーダーとして社会民主主義者の立場から共産党に対決し、満州事変前後からは国家社会主義に転向して社会民主主義に対立して社会民衆党を分裂させ、国家社会党を作り、更に国家社会主義から日本主義に飛び、更に東洋主義に。赤松の「世界を一周したような、カメレオン的日和見振り」といわれた。[v]

そこで、ここでは、国家社会主義について、まず定義を固める必要がある。類似する言葉には、ファシズム、ナチズム、超国家主義、国家主義などがある。

まず「ファシズム」。これについての定義はどうもすっきりしない。かつてコミンテルンは「ファシズムは、現代の退廃の特徴的な現象であり、資本主義経済のすすみゆく解体

---

i 原彬久編『岸信介証言録』毎日新聞社、2003年、p341で岸は「大学時代、理論的に共鳴したのは北一輝です。彼の『国家改造案（原理大綱）』が秘密出版されたとき、僕は夜を徹して筆写したことを覚えています」と語っている。吉本重義『岸信介伝』東洋書館、1956年、p66も。

ii 尚美学園大学総合政策学部総合政策研究紀要第19号、2010年9月

iii 尚美学園大学総合政策論集第11号、2011年1月

iv 関嘉彦『民主社会主義への200年』一藝社、2007年、p5、p8

v 木下半治『日本国家主義運動史』福村叢書、1971年、p187で高畠素之の発言として引用。

本論文目次

とブルジョア国家の分解との表現である」と決議した。[vi]丸山真男は『政治学事典』[vii]で長文の解説をしているが、気になるポイントは以下の通り。「最広義の定義はファシズムを現段階における独占資本の支配体制と実質上同視する」「ファシズムは国家独占資本主義の上部構造的表現である限りにおいて、いかなる先進資本主義国家もそれから免疫されていない」「ファシズムの第一目標は革命の前衛組織の破壊であり、それは直接的なテロや国家権力による弾圧によっておこなわれる」「ファシズムの強制的同質化とセメント化の機能はむろんつねにテロや暴力による脅迫をともない、スパイ、密告制度、忠誠審査など直接間接あらゆる方法による“恐怖”の独裁としてあらわれる」などと解説する。しかし引用した最後の下りでいえば、それをいうなら左右の全体主義というべきだ。[viii]ロシア、中国の共産主義独裁によって史上最大規模の恐怖政治が行われ、多くの人命が失われたのは、かの『共産主義黒書』を持ち出すまでもない。

猪口孝ら編の『政治学事典』[ix]では、「第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の時期に、ヨーロッパの国々を中心に各地に登場した、ある種の政治的イデオロギーと運動である」というものの、「しかしファシズムを定義する特徴が何かということについての議論は、多岐にわたっており、共通見解はない」と、手を焼いている。

有斐閣双書『現代政治学小辞典』[x]でも「（ファシズムに）共通性がある。イデオロギー的には、共産主義・自由主義・国際主義を排撃して全体主義・超国家主義・軍国主義を唱え、政治制度では、議会主義を否定して一党制による独裁の樹立をめざし、権力分立制に反対して中央集権化を求めたことである」と、ほぼ同曲である。『岩波小辞典・社会思想』[xi]では「思想としてのファシズムは、一定の整然とした体系を持っておらず、大衆のおくれた部分を欺くデマゴギーを特徴としている」といい、『岩波小辞典・政治』[xii]でも「その定義は多義的であり」「イデオロギーの面でも、積極的な理論体系に乏しく」と梃ずっている。

結論からいって、ファシズムには、明確な定義づけがないということだ。

これと関連して、日本ファシズム論についての論争がある。日本にファシズムがあったか。あったとすれば、いつのことか、である。日本の“左翼”論壇では、戦前、日本がファシズムに染められ日本を破滅させたという論法を取ってきた。これに異論を唱えたのは、中村菊男[xiii]であり、伊藤隆であろう。中村は、日本にドイツやイタリアのファシズムはない。独裁者もなく、独裁政党もない、と。伊藤は、少し違う。「『ファシズム』と呼ばれる事態が存在しなかったとか、それは日本には

vi　1923年6月23日のコミンテルン決議、『コミンテルン資料集第2巻』大月書店、1979年
vii　『政治学事典』平凡社、1954年、p1162~1167
viii　この点、筒井清忠『二、二六事件とその時代』ちくま学芸文庫、2006年、p13でも同様の指摘をしている。
ix　『政治学事典』猪口孝ら編、弘文堂、2000年
x　阿部斉、内田満編『現代政治学小辞典』有斐閣双書、1981年
xi　大塚金之助編『岩波小辞典・社会思想』岩波書店、1956年、p143
xii　辻清明編『岩波小辞典・政治』岩波書店、1956年、p162～163
xiii　中村菊男は『政党なき時代―天皇制ファシズム論と日米戦争』(毎日ワンズ、2009年)などで、「軍国主義時代ではあったが、権力の一元的集中化現象がみられず、超憲法的勢力が存在せず、大衆的基盤をもつ独裁的政党の出現をみず、セクト的集団的対立が目立ったという意味において、ファシズム体制であったとはいえない」という見解だった。

本論文目次

存在しなかったなどということを主張したことはまったくないのである。私が問題としたのは、『昭和戦前期を何故当然の前提として「ファシズム」であったとするか』という点である。さらに『ファシズム』という語が、その時期の政治体制を特徴付け、その構造をより明確に分析する手掛かりとなるのかという点である」[xiv]と、慎重だ。

左翼的立場でも、日本のファシズムについては多様な意見がある。大内力は中央公論社の「日本の歴史」シリーズで「ファシズムへの道」を担当し、日本のファシズムの特異性に苦慮しているかに見える。「日本のファシズムも、まさに、ファシズムとしての特徴を立派にそなえていたことがわかるであろうが、しかし同時に日本のファシズムは、独、伊のそれとは一見いちじるしく異なる特質を持っていた」と。一方で、「危機におちいった独占資本の反動的政治支配の体制だとか、国家独占資本主義に対応した政治的上部構造だといわれるのである」というが、これはどうであろうか。北一輝に象徴されるように日本のファシストと呼ばれる人々の多くは反資本主義を主張してきたのは紛れもない事実である。丸山門下の秦郁彦すら「日本のファシストたちには反資本主義的傾向が濃厚」としている。その事例として、大財閥へのテロ、満州への財閥進出反対、主要産業の国家管理の主張などを挙げている。[xv]独、伊のような国民運動、大衆動員はない。

ここで「ファシズム」と戦って死んだ河合栄治郎（元東大教授）の「ファシズム」論を取り上げたい。河合は2.26事件の直後に真正面から軍部を批判する論文を帝大新聞に書くという“戦闘的自由主義者”であった。河合はその著『ファシズム批判』などで発禁処分を受け、政府から糾弾され、それとの裁判闘争で身も心も磨滅させた生涯であった。したがって戦後、左翼陣営からも、戦闘的な自由主義者として一目を置かれてきている。[xvi]彼のファシズム論をどう読むか。これを抜きにして日本でファシズム論は語れまい。

河合は、ファシズムの特異性を指摘する。「一般に日本のみならず世界各国のファッシズムは程度の差こそあれ、何れも思想体系を持たないとも云える。之は一つには元来ファッシズムなるものは非常緊急の状態に適応する臨時的の思想であって、社会の永続的恒常的な思想ではないと云うことにも因るのであろう」。[xvii]その上で、日本の特異性として、（1）独自の基盤を持たず、軍部に依存している、（2）運動の目標が著しく消極的、反動的である、と指摘する。但し、北一輝などの積極的な国家改造論はあった。

河合の国家主義、国家社会主義に対する批判は厳しい。それを何点か整理したい。[xviii]（1）赤松らの国家社会主義は議会主義か暴力革命か明確でない。自分は議会主義だ。（2）国家主義は、国家を至上価値と見なすもので、自由主義を圧殺し、現状維持の保守主義になり、弾圧独裁政治に陥る。（3）共産主義者の転向は国家主義との妥協という戦術上の方便かもしれない。（4）国家国民主義と社会主義とは共に自由主義なる思想を中間に挿んで敵対関係にある。凡そ国家主義と社会主義とは到底相調和し得ざる異種物である。（5）「天

xiv　伊藤隆『昭和期の政治（続）』山川出版社、1993年、p10
xv　秦郁彦『軍ファシズム運動史』河出書房新社、1972年、p206~208
xvi　久野収、鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波新書、1956年、p55「2,26事件以後の軍国主義の進行にたいして徹底的にたたかった河合栄治郎のような例外はある」
xvii　河合栄治郎『河合栄治郎全集第11巻』社会思想社、1967年、p268～271
xviii　同上、p73、77、86、102、105、133

本論文目次

皇親政」と叫ばれるが、それは事実上不可能で、「君民の中間はあらざるをえない」。河合の立場は、「理想主義的社会民主主義こそは真正の社会民主主義を代表するものであり、その社会哲学において個人主義を採り、国際平和主義を守り議会主義と言論自由主義とを固執するものであるから、之と国家社会主義とは必然に対立して反撥する」と明快だ。左右の全体主義との戦いである。戦時下で『ファシズム批判』という本を出版し、これだけ言い切るのだから命がけであり、政府の弾圧は避けられなかった。また天皇親政、君臣一体論への批判は正鵠を得て、今日でも説得力がある。

次に、国家社会主義を見てみたい。まず国際的には、どうか。『現代政治学小辞典』[xix]には以下のようにある。「本来ナチズム（民族社会主義）とは別のものであって、19世紀ドイツにおいて、ラッサール、ロートベルトゥスらによって唱道された、国家主導的な社会改良主義を意味する。それは必ずしも、資本主義的制度の根本的変革を要求するものではなく、重要産業の国有化と労資協調的社会政策とによって労働者階級を含め国民一般の福祉向上をめざす。我が国では大正時代以降、高畠素之や赤松克磨らが主張した」と。この解説はマルクス主義にあらずんば社会主義にあらずという古い観点に立っている。橋川文三は日本の国家社会主義の系譜について以下のように説く。「国家社会主義という発想も形の上ではかなり古い起源をもっている。日清戦争後における日本社会の構造変化に対応して、貧富の不平等が表面化したころ『国家的社会主義』（明治30年）を唱えた陸羯南、明治38年8月、斯波貞吉らとともに国家社会党を結成した山路愛山らの名が思い浮かぶが、他に久松義典、福地桜痴らの政治小説にも国家社会主義の発想があらわれている。しかし、はっきりとマルクス主義をふまえ、その経済理論、国家論をふまえた上で国家社会主義を主張したのは高畠を嚆矢とする」「マルクス主義を根底とする高畠的国家社会主義は、極度にコスモポリタンな理論主義的マルクス主義の立場からも、純粋な天皇信仰の立場からも、結局は、ぬえ的なものとして排斥されることになる。高畠の影響は津久井竜雄、石川準十郎らの門下生から、赤松克磨、下中弥三郎らそれぞれことなるタイプの国家主義者にまで及んでいるが、その思想が単一の政治団体を生み出すことはついになかった」という。[xx]

次に超国家主義との関係を見てみたい。「日本ファシズム＝超国家主義の無限遡及」であると橋川文三はいう。日本ファシズム特徴は、家族主義、農本主義、大アジア主義、といったのは橋川の師、丸山真男である。[xxi]昭和期の超国家主義について、「思想の科学」の久野収、鶴見俊輔は「日本の超国家主義―昭和維新の思想」[xxii]で次のように述べている。まず思想的特色として、(1) 伝統的国家主義との思想的きれめがはっきりしていない、(2) 土着的シンボルの回復で、近代思想や革命思想と正面から思想的に対決していない、(3) 大衆をとらえるより、軍部や新官僚と結託す

xix　前掲『現代政治学小辞典』p160
xx　橋川文三『昭和維新試論』朝日新聞社、1993年、p257、259
xxi　橋川文三編『現代日本思想体系31超国家主義』筑摩書房、1964年、p7～8、しかし橋川はこの丸山の見解に批判的だ。
xxii　久野収、鶴見俊輔前掲書、p118~123

本論文目次

る方向、(4) 思想的統一に不足、(5) 伝統的国家主義の圧力に屈し、その別働隊の役割、という。その上で、昭和の超国家主義の特色として、「外来思想の排撃や直接的テロ行動や志士意識や天皇の赤子観」それに「国内改革を対外国策にむすびつける本格的超国家主義」と、いう。

定義の話で、深みに入るのは生産的でない。次に、国家社会主義もしくは超国家主義の具体的な思想家の考えと皇室観を見てみたい。

2. 北一輝の思想と皇室観

北一輝を除いて、国家社会主義は語れない。多くの研究が既になされているが、筆者の結論は、次の2点である。第一は、彼は、やはり社会主義者であることだ。第二は、天皇の名による国家改造を企てたが、その皇室観は天皇機関説であったことだ。2,26事件で逮捕され銃殺刑になるとき、「天皇陛下万歳」を叫ぶのを断った一事[xxiii]が全てを語っていると思う。

さて北の思想と特徴だが、最近出版された岡本幸治の著作が説得力に富む。その前に、彼の代表作である、『国体論及び純正社会主義』、『国家改造案原理大綱、日本改造法案大綱』を一瞥しておく。特徴を抜書きする。

まず『国体論及び純正社会主義』[xxiv]である。以下の4点が目を引く。

第一は、政府公認の国体論の否定である。「日本の国体は君臣一家にあらずして堂々たる国家なり。天皇は本家末家にあらずして国家の機関たる天皇なり。大日本帝国は君臣一家の妄想にあらずして実在の国家なり」と言い切る。

第二は、経済的維新革命である。「今後における社会民主主義の革命とは新たなる社会的勢力が国家の意思となりて経済的階級国家を経済的公民国家に進化せしめんとする法律闘争の経済的維新革命なりと云えり」という。社会主義の具体策は、次の改造法案に盛り込まれる。

第三は、国家社会主義、マルクス主義の否定である。「講壇社会主義[xxv]、国家社会主義と称せらるる鵺(ぬえ)的思想の駆逐なり」と批判し、自らは、社会民主主義もしくは純正社会主義と称した。最終的には、彼は「民主社会主義」と言い換えようとした。いずれにせよこの段階で彼は国家社会主義を批判しており、まさか後年、国家社会主義の元祖と評されるとは皮肉だ。

第四は、個人主義の発展である。「社会の部分をなす個人がその権威を認識さるるなくしては社会民主主義なるものなし。とくに欧米の如く個人主義の理論と革命とを経由せざる日本の如きは、必ず先ず社会民主主義の前提として個人主義の充分なる発展を要す」という。

『国家改造案原理大綱、日本改造法案大綱』[xxvi]はどうか。これは多くの青年将校や右翼活動家のバイブルになったものである。その内容をあえて整理すると、第一は、クーデタの実施である。「憲法停止ー天皇ハ全日本国民ト共ニ国家改造ノ根基ヲ定メンガ為メニ天

xxiii 松本健一『北一輝論』現代評論社、1972年、p131など。

xxiv 北一輝『北一輝著作集第一巻国体論及び純正社会主義』みすず書房、1971年

xxv 「講壇社会主義」とは、ドイツで社会政策を推進した学者グループを指す（岩波小辞典『社会思想』より）。

xxvi 北一輝『北一輝著作集第二巻支那革命外史、国家改造案原理大綱、日本改造法案大綱』みすず書房、1971年

本論文目次

皇大権ノ発動ニヨリテ3年間憲法ヲ停止シ両院ヲ解散シ全国ニ戒厳令ヲ布ク」。つまり天皇を戴くクーデターの実行である。但し3年間と限定つきである。前著との違いは、内外情勢の緊迫化であろう。

第二は、資本主義の改造、社会主義の実現である。「私有財産限度」制の導入である。「私有財産限度―日本国民一人ノ所有シ得ベキ財産限度ヲ3百萬円トス」「私有地限度―日本国民一家ノ所有シ得ヘキ私有地限度ハ時価3萬円トス」「私人生産業限度―私人生産業ノ限度ヲ資本1千萬円トス」など。これは中途半端で資本主義温存だという説[xxvii]もあるが、岡本幸治は違う。「北はマルクス主義者と異なり『私有財産の権利』を強調している。私有財産が自由な個人の経済的前提として重要とするのは、処女作以来の一貫した考えである」「経済構造変革に関する北の基本構想は、国有化至上のソ連型社会主義でもなく、私企業至上の英米型資本主義でもない、独自の混合経済体制の構築である」という。これは従来にない、独自の、しかも説得力のある見方ではなかろうか。

第三は、労働者、国民の権利擁護である。労働者の権利、労働局の新設、8時間労働制、児童の権利、国家扶養の義務など社会保障、国民教育の権利などが続く。岡本は、この提案の背景に、北の社会民主党からの影響を見ている。1900年に誕生した日本最初の社会主義政党「社会民主党」で安部磯雄らが書いたといわれる宣言文、現実綱領に載っていたものの多くが改造法案にあるという。「例えば、都市の土地の公有化・払い下げの禁止、高等小学校までの義務教育化と公費支弁、労働局の設置、学齢児童の労働禁止、道徳健康に有害な事業には婦人労働の禁止、少年婦女子の夜業禁止、労働時間は8時間・日曜労働の禁止、労働組合法の制定、雇主責任法（労働事故の補償）の制定、小作人保護法の制定、普通選挙法の実施、貴族院の廃止、治安警察法の廃止、新聞条例の廃止、などなどである。北が受け入れなかったものの代表は、軍備の撤廃、軍備の縮小である」[xxviii]

こう見てくると、北は紛れもない「社会主義者」といわねばならない。評論家の桶谷英昭は「北は、社会主義者であったことはない」[xxix]と否定するが、しかし前掲の主張からして、到底そうとは思えない。

前述の岡本幸治は、いくつか独自の視点を明らかにしていて興味深い。

一つは、社会主義と国家である。「北は第一に、経済的不公平の打破という社会主義の目的を実現するためには、国家によって土地と資本の公有を図る必要があると主張する。したがって社会主義は必ず国家の存在を認め国家の独立を必要とする。社会主義の対立物は無政府主義」「北の社会主義は国家の重要性を是認するものであったが、ナチズムやソ連、中国、北朝鮮などの社会主義が行ったように、現実の国家を理想視し、指導者を神格化するような国家万能主義、国家至上主義の主張とは明らかに異なるものであった」「社会主義者として出発した北は国家主義者に転

xxvii　森武麿『日本の歴史20アジア太平洋戦争』集英社、1993年、p112「富裕資本家の制限として温和なもの」と森はいう。

xxviii　岡本幸治『北一輝』ミネルヴァ書房、2010年、p54～55

xxix　桶谷秀昭は「北一輝は社会主義者として出発し、特異なファシストとして終わった。こういう見方はほとんど無意味である。北は社会主義者であったことはないし、そこからファシストになり下がったわけでもない。彼は孤立した土着の革命思想家として、日本ナショナリズムの命運に殉じたのである。」という。『土着と情況』南北社、1967年

本論文目次

向したと説く者が少なくないが、それは大きな誤りである。北の『思想核』は処女作以前の段階で出来上がった『国家国民主義』であり、それは危機の際には『国家>国民』主義になる」という。

二つは、国家社会主義、ファシズムと北の関係である。岡本は「戦後の日本では、北の思想を『国家社会主義』あるいはファシズムと理解した者が少なくなかった。国家を重視する社会主義というだけの意味であればその通りなのであるが、戦後の世界で完全否定の対象となったドイツファシズムの担い手ナチスはその典型であると日本の辞書には書かれている。そのドイツではナチ独裁の下で個人の人権などは否定されたとして、『国家社会主義者』であった北もその同類とみなす見解が、一人歩きしていた時代があった」と指摘する。こう見てくると、「ファシズムの教祖」「ファシズムの源流」「国家社会主義の中心人物」というこれまでのレッテルは怪しくなってくる。また北の唱えた科学的社会主義はその後、日本共産党の看板になり、民主社会主義はかつての民社党のイデオロギーであったのは、北にとって想定外のことであったろう。

北で問題になるのは、むしろ皇室観であろう。橋川文三は、松本健一を引用しながら、青年将校らと北の間には意識のズレがあったとみる。松本は「北の天皇論には青年将校のいだいたような天皇＝現人神の信仰は欠如していたことだけを指摘しておこう。その両者の落差は『北は天皇を己の意志（国民意志）の傀儡としようとし、<法案>の読者たちはそこに現人神の天皇をみて蹶起』したとさえいわれるほどのものであった」[xxx]と、そのギャップを指摘する。この事件で逮捕された青年将校の末松太平や、取締り側の安倍源基も、同様の見解だ。[xxxi]しかし、いつの時代もリーダーがどういう確信を持つかが鍵で、あとはそれに付いて行くのではなかろうか。ギャップを過大視するのは疑問だ。

松本の北の皇室観に対する指摘は鋭い。「北は天皇をカリスマだと考えて『法案』をかいたのではなかった。己の意志を、国家の号令機関として存在している天皇を通じて実現しようと企図したのである。天皇を操るのは北という唯一者であり、彼にとって天皇は木偶であった」「青年将校たちと北の『天皇ヲ奉ジテ』の意味はこうしてまったく隔たっていた」[xxxii]とまでいう。その上で、「北はその万世一系皇統説や神孫神話から自由であった。北は天皇を民族の心性の極あるいは日本民族生命体の原核としてとらえず、国家支配の機関としてとらえていた。（中略）その北の天皇観は単に北ひとりのものでなく、明治維新を遂行した元勲たちには、あたりまえの通念としてあったはずである」[xxxiii]と言い切る。この最後の指摘、つまり北の天皇観は決して特別のものでなく時代の通念であったいう指摘は、説得力があると筆者は思う。

しかし、いわゆる民族派の北批判はいまなお凄まじいものがある。それは天皇機関説に繋がる皇室観への集中砲火である。

影山正治は、代表作の一つ『増補 維新者の信条』[xxxiv]で、以下のように語る。「昭和維

xxx　橋川、前掲『試論』p244
xxxi　末松太平『私の昭和史』みすず書房、1963年、p270、安倍源基『昭和動乱の真相』中公文庫、2006年、p258
xxxii　松本健一、前掲書、p95
xxxiii　同上、p303
xxxiv　影山正治『増補 維新者の信条』大東塾出版部、1969年、p3、p161

本論文目次

新の指導原理が、飽くまで醇乎として純なる皇国体の大義、神ながら皇道にあるべきは言ふまでも無い。しかし此の事は当然至極の事でありながら、事実は頗る曖昧模糊の中に考へられて来た。即ち皇道・日本主義の名に於いて、ドイツ流の国家社会主義やイタリー流のファシズム、又は儒教式の大亜細亜主義や仏教（特に日蓮宗と禅宗）式の精神主義が縦横に浸透闊歩して居る」「最右翼たる国家社会主義に於いてすら、ただ戦術・手段として日本の国家機関を認むるに過ぎず、決して国体としての日本を信奉して居る訳ではない。一般にかかる反国体思想の信奉者にして、中道これが放棄離脱を宣したものを、転向者と呼んで居る」という。北を“反国体思想の信奉者”と断罪する。

葦津珍彦は『武士道「戦闘者の精神」』[xxxv]で次のように批判する。「北一輝が『日本改造法案』で教えた革命的国家観に立つかぎり、軍閥幕僚の補佐によって下達される奉勅命令に服従するようでは、革命ははじめから問題にならないはずである。革命とは天皇をして、重臣・軍閥等々の意思代表の地位から、一転して革命党の意思代表者たらしむることを意味する。奉勅命令で崩れ去ったのでは、少なくとも革命党ではない」と、これまた厳しい。

北の評価は、多様である。田中惣五郎は「日本的ファシストの象徴」といい、丸山真男は「日本ファシズムの教祖」と呼んだ。

その“定評”を少し変化させたのは、久野収である。北は「天皇の国民、天皇の日本から、国民の天皇、国民の日本に」変えようとした、と評価する。「（伊藤博文の死後）天皇中心のシステムは、だんだんと統合力、求心力をうしない、まだ外部からはみえなくても、内部から解体をはじめた。この時、伊藤の作った憲法を読みぬき、読み破ることによって、伊藤の憲法、すなわち天皇の国民、天皇の日本から、逆に、国民の天皇、国民の日本という結論を引き出し、この結論を新しい統合の原理にしようとする思想家が、二人出現した。主体としての天皇、客体としての国民というルールを逆転し、主体としての国民、客体としての天皇というルールを作ろうというのである。一人は、吉野作造、他は、北一輝であった。吉野は、議会と政党の責任内閣を基礎として、このルールの実現をくわだて、北は、軍事独裁を通じて、このルールの実現をくわだてた。何れも、天皇と国民の中間に介在するさまざまな機関を排除し、一方で国民に、他方で天皇に直結する政府を作ろうとした点では同一の方向をめざし」と、「上からの官僚支配のシンボルとなった天皇を、下からの国民的統一のシンボルにたてなおすことであった。天皇と国民とが公然と協力しうる体制を彼の言う社会主義のもとに実現しなければ、国家の独立も、これ以上の発展も不可能だ、彼はそう考えた」[xxxvi]と、天皇と国民との関係についての新しい視点を評価している。しかし、それはいわゆる君臣一体、天皇親政論とは違う。むしろ北はその虚構性を否定している。

もう一段、評価しているのは、坂野潤治である。「1936年の2.26事件を起こした思想家北一輝は、生まれながらのファシストとして描かれ、彼が30年前の1906年に23歳で著した『国体論及び純正社会主義』も、国家社会主義的な個所だけが拾い読みされるだけである。しかし23歳の青年が独学に近い形で仕上げたこの大著を、その激越な文体にまどわされずに読めば、その内容は、戦前日本にお

xxxv　葦津珍彦『武士道「戦闘者の精神」』徳間書店、1969年、p215
xxxvi　久野収、鶴見俊輔前掲書、p138～139、p149～150

本論文目次

けるもっとも体系的な社会民主主義論であり、総力戦の後に男子普選の実現による経済的民主主義の確立を期待したものであった」[xxxvii]と。

更に、岡本幸治に行きつく。それは前述の通りである。

3. 国家社会主義者たち

日本における国家社会主義者の系譜については、橋川文三の説で前述した通りである。ここでは、そのうちの代表的存在である高畠素之、津久井竜雄、石川準十郎の三人を取り上げる。

3.1 高畠素之

高畠は日本の国家社会主義の元祖的存在である。彼の名は、マルクスの資本論の日本における最初の翻訳者として著名である。木下半治は『日本国家主義運動史』の中で、次のように評している。「高畠素之は、長脇差と空っ風ともう一つで有名な封建的な群馬県の産であった。京都同志社に学んだこともあり、早くから堺利彦の門下に入り、堺の売文社にあって、山川均と張り合っていた高弟であった。ドイツ語をよくし、マルクスの『資本論』の唯一の全釈者として名があった」といい、その一方で、「（高畠らの）転向社会主義者は、格別に大した大衆的組織をもたない、いわば街頭的・ルンペン的ソシアリストにすぎなかった。高畠素之という一個のボスをめぐる一握りのインテリ＝ルンペンの集団にすぎなかった」と酷評する。

判沢弘は『転向』の中で、高畠を転向者として取り上げている。しかし判沢は高畠の転向が明確でないとう。「日本マルクシズムの思想・運動の淵叢たりし『平民社』『売文社』の伝統に育ち、弾圧と抵抗の十年近い歳月を、堺利彦、大杉栄、山川均、荒畑寒村など、日本社会主義運動の闘将たちと起居をともにしてきた高畠が、1918年頃（大正7,8年）を境に、突如として国家社会主義へと転向して行ったのは何故か？　その理由は未だ明らかにされていない。高畠の門弟たる津久井竜雄・石川準十郎らもその事情について『殆ど知らぬ』（津久井著『右翼』、石川準十郎、雑誌『全労』1959年5号）という状態である」[xxxviii]という。判沢は、その理由は「山川と高畠が相別れる分水嶺はロシア革命の評価にあった、と見ていいのではなかろうか」[xxxix]という。

高畠は社会主義について、どう考えていたのか。高畠は、資本主義の悪い点と長所をそれぞれ指摘している。「我々は資本主義を敵視すると同時に、この利用関係をも敵視する」「（資本主義の）営利の原則をば、社会制度としての資本主義にふくまれる重要な強味とみる」「（営利の原則は）社会進歩の推進力であり、創造能力の発動源泉でもある」[xl]と評価する。この資本主義に対する評価は、高等だ。

国家観についても、明快だ。「我々の国家社会主義は如上ラッサルの国家社会主義とは本質的に前提を異にしてゐる。我々は国家の第一本質を支配に求め、第二本質を階級支配に求める」、と。つまり国家至上主義を否定している。その上で「国家なしには社会秩序は不可能」、「国家主義と社会主義なら鬼に金

xxxvii　坂野潤治『改訂版日本政治史』放送大学教育振興会、1997年、p122
xxxviii　判沢弘「右翼運動家ー津久井竜雄、穂積五一、石川準十郎」『転向・下巻』p81
xxxix　同上、p82
xl　高畠素之『論・想・談』人文会出版部、1927年、p121～129
xli　高畠素之『自己を語る』人文会出版部、1926年、p81、p206

本論文目次

棒、酒に肴じゃないか」[xli]と述べている。国家の機能面を見ている。

もう一つは、皇室観である。それについて参考になるのは、建国祭の祝賀委員を務めていることである。この件について彼は以下のように弁明している。「私は社会主義をもって、建国祭と交換するものではない。むしろ社会主義者としての日本国民として、日本国民としての社会主義者として、進んでこれに参加するのである」「日本国民にとって、日本国家は皇室と共に最高無二の権威である」xliiと。

3.2 津久井竜雄

津久井は高畠の高弟であり、平成元年まで88年の生涯を生きた。新聞記者から高畠の門下に入り国家社会主義者として活躍した。赤尾敏と建国会を、児玉誉士夫と急進愛国党を、赤松克磨と国民協会を、それぞれ作った。戦時中は政党を離れ軍部批判も行っている。戦後は、NHKや読売新聞の論説委員をつとめた。[xliii]

彼は国家否定のマルクス主義を批判した。彼は高畠を紹介しながら、「だいたいその頃の共産主義者や、いわゆる進歩的な思想家といわれる人たちは、ただ国家を蛇蝎のようにののしるところに、自家の本領があり、それが『進歩的』だと考える傾向が強かった」xlivという。

彼の皇室観はどうだったろうか。結論からいうと複雑だ。

まず皇室崇拝論がある。いわく「私たちが左翼の諸君とちがったところは、天皇と大衆の直結によって革新をやろうとしたことで、その点が階級闘争一点張りで、天皇制打倒を叫ぶ共産党やその亜流とちがうところだった」「私たちは、しかしただ戦術的に天皇を利用したわけでなく、日本の天皇はその本質において超党派的なもので、一部の特権階級のカイライたるべきものでなくてはならないことを、日本歴史の全過程を通じて見てとることができると信じた。われわれの頭のなかには、そのとき当然に大化改新や明治維新のイメージが描かれた。つまり本来の天皇と、現在の天皇制との間には、ハッキリと一線が描さるべきもの」「天皇と人民との直結のなかに立つべきであり、そのためには中間に介在する特権支配層を打倒することこそ、真に日本の国体をあきらかにするゆえんであると考えた」[xlv]という。

その一方で、戦後の皇室論は意外である。「新憲法で天皇の地位を国家及び国民統合の象徴としたことは、当をえたことだったとおもった。日本の天皇が合理的に肯定される極限は、おそらくこの辺に存し、これならば近代民主主義との共存も可能である。」「新憲法は天皇をこの地位から解き放ち、民主国家の代表という正当の地位に復したものと考えられる」[xlvi]と現行憲法の地位を評価する。

彼の真意はどちらか。国家社会主義の立場は天皇機関説であろうから、現憲法に満足したのかもしれない。

晩年のインタビューでは更に変わる。「ぼくは右翼運動というのはこの前の戦争までで終わったと思っている。当時、ぼくらの周囲の革新的な考え方は、天皇を革新に利用するといったら語弊があるけれども、天皇を中心にして、天皇のご意志というものは資本主義

xlii　同上、p140
xliii　堀幸雄『最新右翼辞典』柏書房、2006年より
xliv　津久井竜雄『私の昭和史』創元社、1958年、p37
xlv　同上、p50～51
xlvi　同上、p178

本論文目次

的なものではないということで、社会主義を天皇によって肯定し、天皇によってそういう運動を起こそうというのが昭和維新の思想だった」「いままでぼくたちは日本の皇室はヨーロッパの王室とは違うと考えてきたが、周囲をがっちり自民党、財界、高級官僚とつながる勢力で固められちゃってる現実を見せつけられると絶望的になってします。革新右翼が入り込める余地なんてまるでないんだ」xlvii。晩年、彼は右翼運動に絶望したのだ。

3.3 石川準十郎

石川は、高畠の門下で、その後、津久井らと日本社会主義研究所をつくり、大日本国家社会党を結成、同時に大日本労働組合協議会も組織した。戦後は、早大教授を務めた。

「転向」の中で、石川は国家社会主義者で取り上げられているが、結論は、転向者でなく、一貫していた思想家と逆に評価されている。「石川に、戦前戦後を通じて思想上の『転向』はほとんど見られない」xlviii と。

彼の国家観を語る言葉がいくつかある。「国家の消滅即ち無政府社会を意味す」、「国家本来の二機能＝階級的抑圧と対外防護」「国家の新機能＝経済組織的及び文化教育的任務」「我々の見解に依れば、この国家なくしては社会主義は実現され得ないのみならず、また維持され得ない」「国家の概念、国家の本質は、この三者即ち（1）階級搾取維持機関としての国家と、（2）階級支配機関としての国家と、（3）非階級支配機関としての国家との三者の綜合的考察に依って見出されねばならぬ」xlix。

この国家観は、国家至上主義ではない。「国家社会主義にとっての最高至上の権威、最高至上の命令者は、国民的大衆的必要あるのみである」l

また社会主義観も、国有化至上主義ではない。「社会主義を直ちに財産の共同共用と同一視するのは手段と目的を混同したもの」li という。

ただここで少々気になることがある。それは彼が書いた1961年前後には大きな動きがある。1951年には世界の反共産主義の社会主義者はドイツのフランクフルトで「民主社会主義の目標と任務」という宣言を出し、共産主義を批判し、決別した。また日本においては、これに連動する形で、右派社会党は綱領草案をまとめ、1960年にはついに民主社会党が民主社会主義の綱領を引っ提げて結党した。いずれも石川の思想と共通点が多い。しかしどういうわけか、管見では石川はそれらについて直接言及していない。それはどうしてか。間接的に言及したものをみると、共産主義と民主社会主義はいずれも集産主義で転機にある lii、と若干冷やかである。

彼の皇室観はある意味で凄みがある。それは彼が満州国崩壊の壮絶な現場を見てきたこ

---

xlvii 猪野健治『日本の右翼』筑摩書房、2005年、p308~311、猪野健治の平成元年のインタビュー

xlviii 判沢前掲論文、p106

xlix 石川準十郎『共産主義国家論批判』共和書房、1948年、p154、197～204、86、84

l 同上、p89

li 石川準十郎「岐路に立った社会主義」『早稲田政治経済学雑誌』1961年169号、p137～8

lii 同上、p144「社会主義として今日の現実の問題とされているのは、ロシア・マルクス主義(共産主義)と、イギリス労働党およびドイツ社会民主党を代表的なものとする民主社会主義ないし社会民主主義の二つである。この両者は集産主義を採るものであるが、この両者共に今や種々の点で一大歴史的転換を必要とされ、その岐路に立っているものと思われる。それは集産主義と分産主義の問題に止まるものではない。その根本理念、その指導精神よりしてすでに問題とされ、再検討されねばならないものであり、ことにロシア共産主義においてしかりと思われる」

本論文目次

とに関係がある。

「我が終戦当局がただ天皇制の維持のみを問題として、何ら外地同胞の危急を救うの(ママ)特別の処置に出なかったことは、関東軍がただ天皇の命令のみを待って何らその挙に出なかったことと共に、まことに万世に亘る遺憾であった」「天皇制は国民に信頼さえあれば、仮令一時外部的に廃止されようとも存続し、やがて独立と共に外部的にも公然復活され得る」[liii]とまでいう。

あとがき

北から始まり、石川といい、津久井といい、皇室については一見冷ややかだが、それは国家社会主義者に共通したものである。いわば合理的、機能的国家観、皇室観といえる。

なお筒井清忠は「昭和超国家主義運動の天皇観」[liv]という小論の中で、「変革シンボル」(天皇主義)、「理念としての天皇」(改造主義)、「現実の天皇」(復古主義)と天皇観を分類していて興味深い。それは拙稿でこれまで取り上げてきたように、戦前からの分類でいえば、「日本主義」と「国家社会主義」との違いになるであろう。赤松克磨が、共産主義から社会民主主義、そして国家社会主義、さらに日本主義、そして東洋主義と転々とした、あの分類に戻ることになる。

最後に少し気になるのは、いわゆる「革新官僚」の国家観、皇室観、経済体制観と、国家社会主義者のそれとの関係である。「革新官僚」のドンといわれた岸信介が北一輝に共鳴したことは前述したが、共通部分が多い。原彬久は『岸信介』の中で、「青春の刻印―国家社会主義への道」[lv]とまで書いた。「革新官僚」との違いは、政権奪取の手段方法の違いだけだったのか、筆者にとっては次の課題だ。

liii　石川準十郎、『流れ』1957年、2－3月号
liv　筒井前掲書、p372～373
lv　原彬久『岸信介』岩波新書、1995年、p17

本論文目次